

綾歌町内遺跡発掘調査報告書

第 9 集

平成16年度国庫補助事業報告書

行末西遺跡

西長尾城跡

2005. 2

綾歌町教育委員会

はじめに

我が綾歌町には、縄文時代晩期以降の各時代に、先人の手によって築かれた文化遺産が数多く残されています。特に弥生時代前半期から古墳時代初頭にかけては、近年の発掘調査によって、かなり密度の高い集落が開けていたことが確認されています。

これらの人々によって多くの墳墓も活発に造られており、現在も各所にその跡をみることができます。その中でも栗熊東に所在する快天山古墳は、日本最古の刳抜式石棺を主体部に3基有する前期前方後円墳で特に貴重な文化財といえます。平成13年度から実施してきた調査の成果によって、昨年9月30日付けで国史跡に指定されました。

今後は、快天山古墳の活用に向けた整備を軸に文化財保護行政を進めていく予定であります。

さて、綾歌町では平成8年度から国庫補助によって綾歌町内遺跡発掘調査事業を実施しております。今年度も2件の事業を対象に継続して実施することになりました。

1件は、農地の宅地開発に伴う試掘調査であります。本町の代表的な集落遺構として著名な行末西遺跡内での開発が計画されたことに伴い調査を実施した結果、密度は薄いですが集落遺構の一部を確認することができました。

もう1件は、平成12年度まで実施してきた西長尾城跡遺構分布確認のための測量調査の実施です。今回までの調査で尾根上に展開する遺構の主要な部分約26,000㎡の測量が完了しました。中世の山城としての設備が至るところに良好に保存されており、その配置状況が判明しました。今後は、今回までの調査で得られた資料を基礎として構造解明に向けた調査に移行して参りたいと思っております。

これまでに調査された様々な遺跡について、さらに調査研究を重ね、古代の生活等を明らかにするとともに、遺跡の保護・活用を図り、永く後世に伝えることは、私達に課せられた使命であると考えます。間もなく市町合併によって新たな枠組みでの行政に取り組むこととなりますが、我が町に所在する貴重な文化遺産の保存整備に本報告書が活用されることを念じています。

平成17年2月28日

綾歌町教育委員会教育長 土岐道憲

例 言

1. 本書は、綾歌町教育委員会が、平成16年度国庫補助事業として実施した綾歌町内遺跡発掘調査の概要報告書である。
2. 今回の遺跡発掘調査は、行末西遺跡と西長尾城跡を対象とした。
3. 調査主体は、綾歌町教育委員会である。
4. 行末西遺跡の試掘調査は、綾歌町教育委員会近藤武司が担当して実施した。
5. 西長尾城跡の現地測量調査は、近藤の監督の元、株式会社橋本測量設計に委託して実施した。
6. 資料整理及び本書の執筆については、近藤が行った。
7. 本書の測量図の縮尺は、スケールで表示した。また、方位は国土座標第IV系による方位で示した。
8. 実測図面は、綾歌町教育委員会に保管している。
9. 挿図については、国土地理院の25,000分の1地形図を調整した綾歌町管内図（承認番号 四複第134号）及び綾歌町航空測量図を使用した。
10. 本書の作成にあたって西岡達哉氏（香川県文化財調査センター）の協力を得た。ここに記して感謝の意を表す。

目 次

本 文 目 次

第Ⅰ章 平成16年度綾歌町内遺跡発掘調査事業概要	1
第Ⅱ章 行末西遺跡試掘調査	4
1. 地理的環境	4
2. 歴史的環境	4
3. 調査に至る経緯	7
4. 調査結果の概要	8
5. まとめ	11
第Ⅲ章 西長尾城跡測量調査	15
1. 地理的環境	15
2. 歴史的環境	15
3. 調査に至る経緯	18
4. 地形の概要	18
5. まとめ	20
6. 追記	20
第Ⅳ章 まとめ	27

挿 図 目 次

第1図 平成16年度綾歌町内遺跡発掘調査事業対象地	3
第2図 行末西遺跡と周辺の遺跡の位置	6
第3図 調査区の位置関係	7
第4図 1区トレンチ配置図	8
第5図 1区第4トレンチ遺構略測図	9
第6図 1区第5・6トレンチ遺構略測図	10
第7図 1区出土遺物	10
第8図 2区トレンチ配置図	11
第9図 西長尾城跡と周辺の遺跡の位置	17
第10図 西長尾城縄張り図	19
第11図 西長尾城跡測量・遺構分布図	折込

表 目 次

第1表 1区各トレンチ概要	9
---------------------	---

第2表	2区各トレンチ概要	1 1
第3表	遺構一覧 (No.1)	2 2
第3表	遺構一覧 (No.2)	2 3
第3表	遺構一覧 (No.3)	2 4

図 版 目 次

図版 1	壺 (第7図1)	1 3
図版 2	壺 (第7図2)	1 3
図版 3	高杯 (第7図3)	1 3
図版 4	高杯 (第7図4)	1 3
図版 5	調査風景 (1区第1トレンチ)	1 4
図版 6	1区第4トレンチ内溝遺構	1 4
図版 7	1区第5・6トレンチ内溝遺構	1 4
図版 8	1区第4トレンチSD-2	1 4
図版 9	1区第4トレンチSD-3	1 4
図版 10	1区第1・2トレンチ完掘	1 4
図版 11	2区第2トレンチ完掘	1 4
図版 12	2区第4トレンチ完掘	1 4
図版 13	西長尾城跡遠景	2 5
図版 14	西長尾城跡近景	2 5
図版 15	調査風景	2 5
図版 16	調査風景	2 5
図版 17	二重堀切	2 5
図版 18	二重堀切	2 5
図版 19	主郭部近景	2 5
図版 20	第30郭枡形虎口	2 5
図版 21	遠景 (北から)	2 6
図版 22	遠景 (南から)	2 6
図版 23	主郭部近景	2 6
図版 24	第24郭東面	2 6
図版 25	主郭部から南側を望む	2 6
図版 26	第32郭	2 6
図版 27	第24郭西面	2 6
図版 28	第22郭西側	2 6

第 I 章 平成 16 年度綾歌町内遺跡発掘調査事業概要

綾歌町では、昭和の終わりごろから大規模団地や大型レジャーランドの建設、また国道バイパス建設工事や関連事業などが活発に実施されるようになってきた。綾歌町には比較的多くの埋蔵文化財が所在していることから、これらの事業に伴う発掘調査が積極的に行われるようになった。また、地域住民の文化財愛護に対する関心も高まりつつあることから学術的な調査も実施し、遺跡の内容を明確にし、活用に向けた資料整備も進めています。

このような背景に伴い、綾歌町では調査体制の充実を図り、平成 8 年度から綾歌町内に所在する遺跡の確認調査に国庫及び県費補助金をあてて実施している。今年度については、県費補助金の割り当てがなくなったが、国庫補助金をあてて同事業を継続して実施することとした。

国庫補助申請については、平成 16 年 4 月 19 日付け 16 綾歌教委発第 201 号で提出し、平成 16 年 6 月 16 日付け 16 教文第 8404 号で交付決定を受けた。

今年度については、栗熊西から富熊南部にかけて分布する行末西遺跡の分布確認調査および岡田上字国吉所在の西長尾城跡分布確認調査を実施した。

行末西遺跡は、平成 7 年度に計画された町道西行末本村線の拡幅改良工事に伴って発見された集落遺跡で、すぐ南東の小丘陵上に分布が確認されている弥生時代前期の行末遺跡と同時期から古墳時代初頭にかけての所産の遺物が多く出土している。

遺跡の内容としては、溝が主で弥生時代前期の遺物を埋土中に包含しているものと弥生時代後期遺物を包含しているものがそれぞれある。その他の遺構は、確認できたものは住居で掘立柱の住居若しくは倉庫や竪穴式住居がある。

溝遺構の包含遺物量は相当量であったが、それに見合うだけの住居が伴わないことから遺跡本体は行末遺跡のある台地上であるか、若しくはこの大東川沿岸部が調理場等に限定して使用されていたものと考えられる。

今回、この東側で 2 件の小規模開発が計画されたことにより分布確認調査を実施することになった。地形的には、本来南部連山から派生してきた丘陵の尾根上であるのだが、現在水田として使用されており、調査前から相当な削平を受けているものと想定された。

調査の結果、溝を主体とした遺構の分布が認められた。やはり削平を受けているようで、本来の状況は確認できないが、埋土に含まれる土器から弥生時代から古墳時代初頭にかけて使用されていたものと考えられる。

西長尾城跡は、中世城郭として著名な遺跡であり、郭や堀切など、様々な遺構が比較的良好に残存している。古くからの調査によって大まかな遺構分布状況は報告されているものもあるが、精度に欠けており、町教委としては、今後の適切な保存・活用をするための基礎資料を作成するために平成 8 年度から平成 12 年度まで、継続して平板測量による遺構分布確認調査を実施してきた。その調査で主郭部を中心とした連郭式郭列の分布する主郭部及びその南東部のヤグラ付近から東の尾根上の削平地の大部分の遺構分布状況がつかめている。

本丸を中心とした主郭部は堀・郭の切岸を組み合わせ、密に防御施設を備えているが、南東部の鞍部を隔てた『ヤグラ』から東は、延長160mに及ぶ広大な削平地が続く。東の先端部に二重堀切等を備えるが、主郭部とは明らかに様相が違う。東の高大な削平地は、陣城としての性格が強いようである。削平地の北肩は、森林公園管理道によって掘削を受けており詳細については不明であるが、南肩の状況や北側斜面の踏査状況から推察すると防御を目的とした施設は無かったと考えられる。

今年度の調査では、様々な制約もあり、測量を委託しての実施となったが、尾根上の遺構で測量できずに残されていた東端の二重堀切付近と主郭部から南東のヤグラにかけての斜面部についての確認をすることができた。

今回の調査で、尾根上に展開する遺構の主要な部分のほとんどを確認することができた。今後は、この調査で得られた成果をもとに、それぞれの遺構の構造を解明できるような詳細調査を実施していきたいと考える。

以上、町内2箇所を試掘及び測量調査を実施した。

平成16年度の町内遺跡発掘調査事業は、平成16年4月1日より実施し、平成17年2月28日に終了した。

第1図 平成16年度綾歌町内遺跡発掘調査事業対象地





行 末 西 遺 跡

第Ⅱ章 行末西遺跡試掘調査

調査対象地	綾歌町栗熊西字板井戸	1180-4
		1181-2
		1182-1
		1182-4
		1182-5
	綾歌町富熊 字沖	826-1
		827-3
調査期間	平成16年6月7日～6月11日	
調査面積	219㎡	

1. 地理的環境

綾歌町は、香川県の中央からやや西寄りに位置し、阿讃山脈の最前線ともいえる大高見峰、猫山、城山の連山を南限として、北側には肥沃な丸亀平野が広がる。

町域の北側は低丘陵を境にして飯山町と接し、また、北東部は坂出市・綾南町と接する横山山塊が南北に延びており、平野部からの眺望は遮られている。

一方、北西部は、土器川流域の沖積平野に向かって幾筋もの洪積台地の尾根筋が延びており起伏に富んだ地形を形成している。

また、町の中央部は、南方の連山に源を発した大東川水系に沿って盆地状の沖積平野が広がっており水利の便もよく、阿野郡条里の方格地割が現在においても良好に残存している。

このように、綾歌町では、地形・気候・水利に恵まれ、生活するには非常に適していることもあり、古くから人々の生活が営まれていたようである。

また、綾歌町からは、堤山北裾の低地を抜けると容易に綾川水系の沖積平野である羽床盆地にたどり着くことができるので、この地域とは密接に交流を行っていたと推察できる。

さらに、大東川水系で結ばれた海浜部との交流も行われていたと推察できる。

行末西遺跡は、大高見峰山塊から派生し北方に延びる尾根が平野に差し掛かった低丘陵上に分布する行末遺跡から北西方向の平野部に位置する。その西脇には、現在も大東川が流れている。更にもその西側は、洪積台地への段丘となっていることから大東川を西限とするとと思われる。

2. 歴史的環境

綾歌町内では、ここ最近の発掘調査により行末西遺跡、佐古川遺跡、佐古川・窪田遺跡から縄文時代晩期の土器が発見されるようになってきた。遺構を伴うものは、佐古川遺跡の掘立柱住居のみであるが遺物の採取量からみても当該期には、既に多くの人々の生活が営まれていた地域であることは容易に推察される。

弥生時代になると、前期では、行末遺跡に代表される大規模集落遺跡が確認されている。後期では、次見遺跡や下土居遺跡が確認されている。また、近年の発掘調査では行末西遺跡、佐古川遺跡、椎尾遺跡、椎尾東遺跡、佐古川・窪田遺跡でも集落遺跡が発見されている。

このような人口と生産力の増大を背景に造墓活動も活発に行われてきたようで、南部の丘陵部に平尾墳墓群、石塚山古墳群、定連遺跡等が築造されている。また、近年の発掘調査では、佐古川・窪田遺跡で弥生時代前期後半から中期初頭にかけて築造された最古級の周溝墓群が発見されている。

古墳時代に入ると、集落遺構は行末西遺跡、佐古川遺跡、佐古川・窪田遺跡、椎尾遺跡で僅かに確認されているだけであるが、古墳についてはあらゆる所に多種多様なものが築造されるようになってくる。

前期には、横山山麓上に横山経塚古墳群、横峰古墳群などの讃岐独特の積石塚古墳が築造されている。その直後には同山塊に陣の丸古墳が築造されている。丘陵を南に下ると、現在の住吉地区で平野部に到達するが、その先端部に快天山古墳が築かれている。

快天山古墳は、この地域の前方後円墳築造形態を集約したものであると同時に、それまで地域の独自文化で造墓活動が行われていた中に畿内の築造様式を取り入れはじめた初期段階のものであります。規模も、全長が100メートル近くありこの地域では見られない突出したものである。さらに、その後は、前方後円墳は終息し中小円墳が中心となる。

中期後半から後期前半の墳墓群は羽床盆地縁辺部と岡田台地上に集中しており、それまでの横山山塊および高見峰山麓では希薄になる。

羽床盆地では、綾川脇の段丘縁辺部に円墳の群集がみられ、その中には津頭東、津頭西、末則古墳など他を圧倒するものも含まれる。

岡田台地上には車塚を中心とした数十基の中小円墳から構成される岡田万塚古墳群が形成される。岡田万塚古墳群は、早くからの開墾等によりそのほとんどが消滅しており、現在その姿を確認できるのはわずか6基となっている。

後期後半には、宇閑神社古墳などの横穴式石室を有する古墳が高見峰北麓に築かれているが群集は認められない。

古代遺跡については、原遺跡、庄遺跡、北原遺跡といった集落遺跡が発見されている。

中世に入る頃には、坂出市と境界をなす横山山頂に横山廃寺が建造されている。中世後半期には南部連山の城山の頂上付近に西長尾城が築かれる。

西長尾城は、三野郡詫間郷筥御崎を領して海崎伊豆守と名乗り白峰合戦での軍功を認められた長尾大隅守元高が応安元年（1368）に城主となる。長尾一族は、この地で勢力を伸ばしており、炭所、岡田、栗隈などに支城を構えて阿野、鶴足、那珂郡の南部で勢力を誇った。

その後、土佐の長宗我部一族の讃岐侵攻により城主が長宗我部元親配下の国吉甚左衛門へ代わり、讃岐の拠点としての役目を果たした。天正13年（1585）、豊臣秀吉の四国征伐により廃城するまでの二百年余り長尾一族及び長宗我部一族によって守られてきた城である。

また、集落としては岡田台地に北山遺跡が確認されている。

各時代を通じて近隣地域との交流が行われていたことを裏付けるように、他の地域で生産されたと思われる土器も数多く発見されている。

行末西遺跡は、現在の栗熊西地区平野部の西北端で富熊地区との境界を接する付近に分布している集落跡で、そのすぐ南東には行末遺跡の分布する低丘陵が延びている。

行末遺跡は、弥生時代前期集落としての報告があるが、行末西遺跡からは縄文時代晩期も微量に含まれるが、弥生時代前期から古墳時代初頭にかけての様々な遺物が見つかる。



- | | | | | |
|---------------|--------------|--------------|------------|------------|
| 1. 行末西遺跡 | 2. 行末遺跡 | 3. 富熊神社神事場古墳 | 4. 油山池北堤古墳 | 5. 富熊6号墳 |
| 6. 蔵の内油山池丘陵古墳 | 7. 油山遺跡 | 8. 塔寺跡 | 9. 薬師山古墳 | 10. 薬師山遺跡 |
| 11. 快天山古墳 | 12. 住吉神社山頂古墳 | 13. 栗熊遺跡 | 14. 栗熊東遺跡 | 15. 堤池東遺跡 |
| 16. 原遺跡 | 17. 佐古川・窪田遺跡 | 18. 石塚山古墳群 | 19. 佐古川遺跡 | 20. 宇閑神社古墳 |
| 21. 定連遺跡 | 22. 北原遺跡 | 23. 椎尾東遺跡 | 24. 椎尾遺跡 | 25. 北原古墳 |
| 26. 井原比古墳 | 27. 古新田 | | | |

第2図 行末西遺跡と周辺の遺跡の位置 (S=1:25,000)

3. 調査に至る経緯

栗熊西字板井戸から富熊字沖にかけては沖積平野が広がっており、現在においても条里地割が良好に確認できる。

この地域には古くから条里地割に沿った道路が碁盤の目状に整備されている。しかしな

がら、いずれも幅員が不足しており現代の車社会においては耐用し兼ねるものであった。

綾歌町では、平成に入り町南部に大型レジャー施設の建設計画や森林公園の整備の計画などに伴い、町以北部からの幹線道路整備の一環として町道西行末本村線の拡幅改良事業に着手している。

平成7年度には、行末遺跡隣隣で大規模に拡幅事業が計画されたことに伴い、綾歌町教育委員会では事前調査を実施した。その際に、発見されたのが行末西遺跡である。

数年前に、町道改良事業が完了したが、町南部の大型レジャー施設は休園してしまっていた。しかし、昨年4月に再開する運びとなったことから、相当の交通



第3図 調査区的位置関係 (S=1:2,500)

量が見込まれることとなった。

さて、当該地において、ほぼ同時期に2件の造成計画が持ち上がった。1件は個人宅地建設に伴う造成で、もう1件はコンビニエンスストア建設に伴う造成であった。

両計画ともに町道西行末本村線に接するものであり、平成7年度に実施した発掘調査で遺跡が確認された箇所であった。

そこで、事前の協議をする過程で照会文書を提出してもらい、遺跡の分布調査を実施することとした。照会文書は、平成16年5月7日付け及び平成16年5月21日付けでそれぞれ提出された。

町教育委員会では、その後正式に調査体制を整え平成16年6月7日から調査に入った。諸般の制約によって6月11までの5日間で掘削から埋め戻しまでの全ての作業を実施することとなった。

途中、悪天候に見舞われ、トレンチ壁面が崩壊したこと、調査区脇に用水路が通っており絶えず水が湧き出すことなどの障害もあり記録は略式で行わざるを得なかった。

掘削は、重機で実施した。トレンチ内精査及び遺構の掘り下げは人力で行った。

調査地が2箇所に分かれているため、南側のコンビニエンスストア建設予定地を1区、北側の個人宅地建設予定地を2区とした。

調査の結果は、後述する。

4. 調査結果の概要

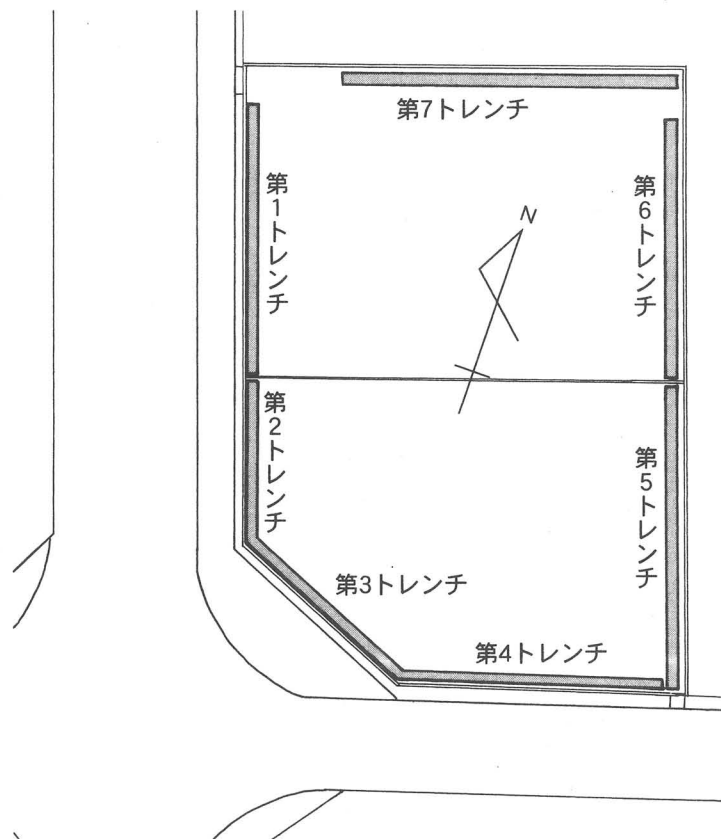
今回の調査は、平成7年度の調査で確認された行末西遺跡の隣接地で計画された2件の宅地造成事業に伴うものである。当時確認された行末西遺跡の分布内容から想定して周知遺跡としてのエリア設定を行っており、いずれの計画地もこのエリアに含まれていることから、事前調査を実施することになった。

2件の開発計画の予定地は、いずれも行末西遺跡の範囲内ではあるが、300メートル程離れているため、区分けをして試掘調査を実施した。

まず、遺跡の残存状況がよいであろう南側のコンビニエンスストア建設予定地を1区として確認調査を先行させた。

1区

行末西遺跡は、これまでの調査経験から判断すると、現地表



第4図 1区トレンチ配置図 (S=1:600)

面から少し掘り込むと、水分を多く含んだ砂層の堆積が見られるところが多く、その層を掘っていると伏流水が滾々と湧き出すことがある。そうなる調査の進行の妨げになると共にトレンチ壁面の砂層部分から崩落していき記録をとることが不可能になる場合もある。

このことから、開発計画から十分に検討し、最低限の掘削量で調査計画を立てた。

1区計画は、建物の基礎を含めて全てが現状地盤の上に盛土を行い、その中で行われるというもので掘削を伴うものではない。

盛土を行うことに伴う擁壁の設置や排水路の設置に伴って、計画地の外周が最大で20センチメートル程掘り下げられることから、試掘トレンチはその部分を利用して設定した。地籍上は5筆にまたがった計画であるが、現況が南北2枚の水田に仕切られていることから、地籍上の復元は行わずに現況に沿った調査とした。

重機掘削で実施することから部分的に掘削できない箇所は出てくるが、1～7トレンチを設定した。

以下、トレンチ調査の結果を記述する。

1区では、ほぼ全域にサヌカイト片や弥生土器片を包含する層の堆積が見られる。

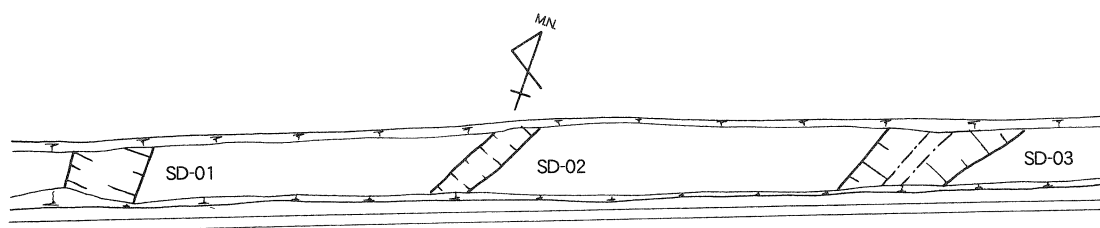
トレンチ調査による壁面の観察によって、当地の旧地形は南から北、また東から西に下る緩やかな傾斜地であったことが読み取れる。

トレンチ名	延長(m)	主な遺構	主な出土遺物
第1トレンチ	21.7	浅い落ち?	サヌカイト片 弥生土器片
第2トレンチ	13.0	無	弥生土器片
第3トレンチ	14.8	無	無
第4トレンチ	23.1	溝3条	弥生土器片 (壺・甕・高杯) 土師器片 (高杯)
第5トレンチ	24.3	溝1条 ピット1	弥生土器片
第6トレンチ	20.8	溝1条	弥生土器片 サヌカイト片
第7トレンチ	26.6	無	弥生土器片

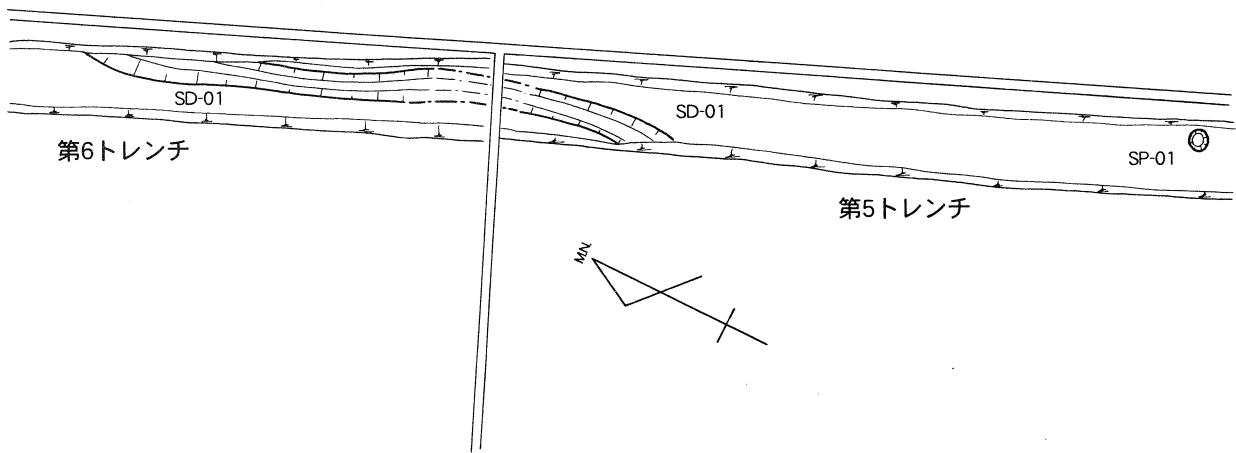
第1表 1区各トレンチ概要

現在はほぼ水平な水田として利用されていることから、開墾によって高地部分については全て削平を受けていることが推定できる。

この削平は各時代を通じて行われていたようで、住居跡に関連すると考えられる遺構は、第5トレンチでピットがひとつ見つかったのみである。また溝が第4トレンチで3条、第5、6トレンチで1条確認できた。いずれも直上の堆積層が溝の埋土と同様でないことか



第5図 1区第4トレンチ遺構略測図 (S=1:125)



第6図 1区第5・6トレンチ遺構略測図 (S=1:125)

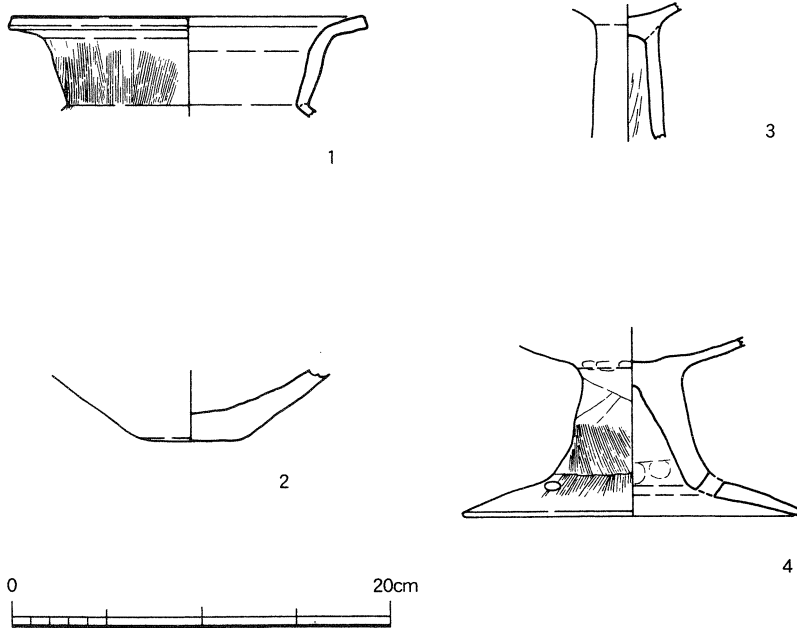
ら、後世の削平を受けており、上半部は消滅してしまっていると考えられる。

確認された溝遺構は全て、南南西から北北東方向に展開しているようで、恐らく旧地形のコンターラインに沿った配置であると考えられる。

後は、遺物を伴わず遺構であるかどうかの判断の難しい浅い落ちは所々で認められる。出土遺物は、堆積土層中に含まれる細かなものがほとんどで、摩滅状況から遺構に伴うものではないと判断できる。形状の特定ができるものは、僅かで第4トレンチの溝遺構 (SD-02・SD-03) での出土遺物が中心であった。

SD-02からは、壺底部2、高杯4が出土した。弥生時代後期後半の所産と考えられる。

SD-03からは、広口壺口縁1が出土している。弥生時代後期後半の所産と考えられる。



第7図 1区出土遺物 (S=1:4)

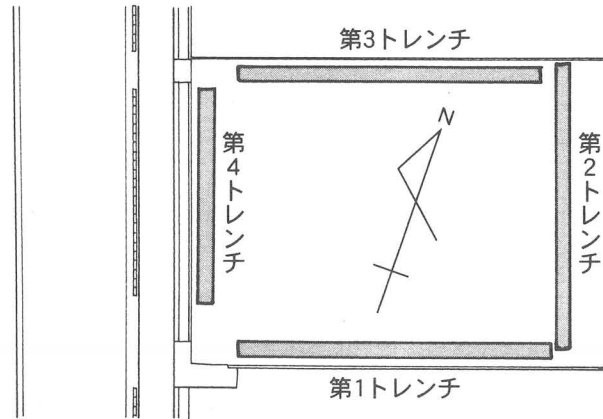
また、出土地点は不明であるが、古墳時代前半の所産である土師器高杯3が出土していることから、行末西遺跡は古墳時代までは拠点集落として栄えていたものと考えられる。

2区

2区の開発計画は、1区と同様で建築物は現況地盤上の盛土中で建設されるというもので、仮に遺構の分布があったとしても影響を及ぼすものではなかった。

外周の擁壁のみ、掘削を伴うことから1区同様にその掘削部分を利用したトレンチ調査とし、不用な箇所への掘削行為は行わないこととした。

また、地籍上は2筆になっているが現況として1枚の水田になっている



第8図 2区トレンチ配置図 (S=1:500)

るので、現況に合わせて東西南北それぞれの面に1~4トレンチを設定した。

調査の結果、浅い落ちを確認できるものの明確な切り込みの確認には至らず、遺構であることの特定には結びつかなかった。

遺物を伴わないこともその要因にあげられる。

唯一、西面に設定した第4トレンチからは、土師質の土器片が検出されたが、摩滅が激しいのと体部であることから時期の特定もできなかった。

また、堆積土に微量の土器片を包含するが、距離をおいたところからの流れ込みである可能性が強く、直近に住居跡などの遺構が展開していることを示唆するものではなかった。

トレンチ名	延長(m)	主な遺構	主な出土遺物
第1トレンチ	21.0	溝状落ち	無
第2トレンチ	19.0	浅い落ち	無
第3トレンチ	20.3	無	無
第4トレンチ	14.3	溝状落ち	土師質土器片

いずれにしても、現況から想定すると、後世の削平を受けていることは間違いなさであろうから、当時の状況をつかみきることはできないが南側の1区と比較しても遺跡密度も乏しいことには変わりはない。

第2表 2区各トレンチ概要

5. まとめ

丸亀平野の南東部に位置する行末西遺跡は、弥生前期に栄えた行末遺跡北西部の平野に展開する集落跡である。南部、東部に延びている丘陵上には多くの古墳が造られていることから、その以前には人々の安定した生活が営まれていたことが想定される。

現在までに確認されている集落遺跡は行末遺跡や行末西遺跡、佐古川遺跡、佐古川・窪田遺跡など町内で16箇所ほどである。その中でも、特に大規模集落であると考えられているのが佐古川遺跡と行末西遺跡を含めた行末遺跡である。

これらの遺跡からは、縄文時代晩期に遡る遺物や遺構が見つまっていることから他の地域よりいち早く人々の定住化が始まった地域であると考えられる。また、弥生時代の中頃には墳墓の初期段階である周溝墓も多く築かれていることから、小集落としてのまとまり

があったことも推察される。

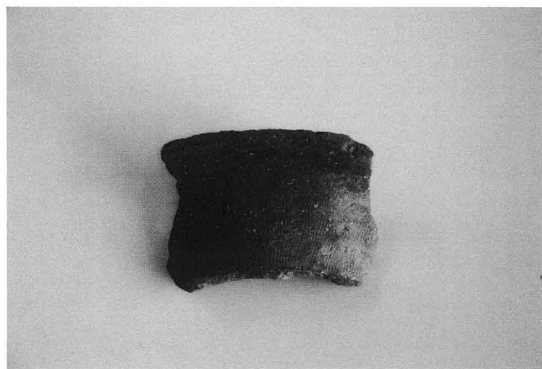
この地域での本格的な発掘調査は、平成7年度に町道改良工事に伴い実施されているが、まだまだ遺跡の全容についてはつかめていない。今後もこのような小規模な調査や研究を重ねていき、弥生時代から古墳時代初頭にかけての資料の充実を図っていきたい。

尚、個人住宅建設及びコンビニエンスストア建設に伴う照会文書に対する回答文書は、平成16年7月1日付け16綾歌教委発第614号及び615号で提出した。

また、香川県教育委員会への試掘調査の結果報告は、平成16年7月2日付け16綾歌教委発第616号で提出した。

出土遺物があったことに伴い、所轄警察署長への埋蔵文化財発見届は平成16年6月30日付け16綾歌教委発第336号で、香川県教育委員会教育長への埋蔵文化財保管証は平成16年6月30日付け16綾歌教委発第337号でそれぞれ提出した。

1 トレンチ出土遺物



図版1 壺 (第7図1)



図版2 壺 (第7図2)



図版3 高杯 (第7図3)



図版4 高杯 (第7図4)



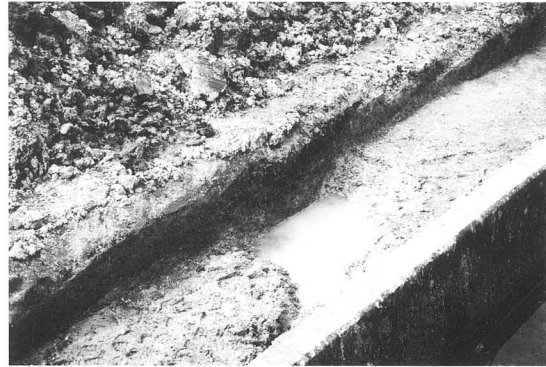
図版5 調査風景（1区第1トレンチ）



図版6 1区第4トレンチ内溝遺構



図版7 1区第5・6トレンチ内溝遺構



図版8 1区第4トレンチSD-2



図版9 1区第4トレンチSD-3



図版10 1区第1・2トレンチ完掘



図版11 2区第2トレンチ完掘



図版12 2区第4トレンチ完掘

西長尾城跡

第三章 西長尾城跡測量調査

調査対象地	綾歌町岡田上字国吉 2 3 1 2 - 1 0 2 3 1 2 - 1 3
調査期間	平成16年7月20日～9月17日
調査面積	約2,300㎡

1. 地理的環境

綾歌町は、香川県の中央からやや西寄りに位置し、阿讃山脈の最前線ともいえる大高見峰、猫山、城山の連山を南限として、北側には肥沃な丸亀平野が広がる。

町域の北側は低丘陵を境にして飯山町と接し、また、北東部は坂出市・綾南町と接する横山山塊が南北に延びており、平野部からの眺望は遮られている。

一方、北西部は、土器川流域の沖積平野に向かって幾筋もの洪積台地の尾根筋が延びており起伏に富んだ地形を形成している。

また、町の中央部は、南方の連山に源を発した大東川水系に沿って盆地状の沖積平野が広がっており水利の便もよく、阿野郡条里の方格地割が現在においても良好に残存している。

このように、綾歌町では、地形・気候・水利に恵まれ、生活するには非常に適していることもあり、古くから人々の生活が営まれていたようである。

また、綾歌町からは、堤山北裾の低地を抜けると容易に綾川水系の沖積平野である羽床盆地にたどり着くことができるので、この地域とは密接に交流を行っていたと推察できる。さらに、大東川水系で結ばれた海浜部との交流も行われていたと推察できる。

西長尾城跡は、南部の連山の中でも西端に位置する標高375.2mの城山（Siroyama）丘陵部に位置する。頂上からの視野は、東部については城山と同じ丘陵に連なる猫山、高見峰により視界を遮られるが、その他の方位については広く眺望することができる。

また、城山の南、西、北面は急峻な要害地形をなし、丘陵尾根や斜面上部を加工し、郭等の防御施設の役割を果たしている。

2. 歴史的環境

綾歌町内では、ここ最近の発掘調査により行末西遺跡、佐古川遺跡、佐古川・窪田遺跡から縄文時代晩期の土器が発見されるようになってきた。遺構を伴うものは、佐古川遺跡の掘立柱住居のみであるが遺物の採取量からみても当該期には、既に多くの人々の生活が営まれていた地域であることは容易に推察される。

弥生時代になると、前期では、行末遺跡に代表される大規模集落遺跡が確認されている。後期では、次見遺跡や下土居遺跡が確認されている。また、近年の発掘調査では行末西遺跡、佐古川遺跡、椎尾遺跡、椎尾東遺跡、佐古川・窪田遺跡でも集落遺跡が発見されている。

このような人口と生産力の増大を背景に造墓活動も活発に行われてきたようで、南部の丘陵部に平尾墳墓群、石塚山古墳群、定連遺跡等が築造されている。また、近年の発掘調査では、佐古川・窪田遺跡で弥生時代前期後半から中期初頭にかけて築造された最古級の周溝墓群が発見されている。

古墳時代に入ると、集落遺構は行末西遺跡、佐古川遺跡、佐古川・窪田遺跡、椎尾遺跡で僅かに確認されているだけであるが、古墳についてはあらゆる所に多種多様なものが築造されるようになってくる。

前期には、横山山麓上に横山経塚古墳群、横峰古墳群などの讃岐独特の積石塚古墳が築造されている。その直後には同山塊に陣の丸古墳が築造されている。丘陵を南に下ると、現在の住吉地区で平野部に到達するが、その先端部に快天山古墳が築かれている。

快天山古墳は、この地域の前方後円墳築造形態を集約したものであると同時に、それまで地域の独自文化で造墓活動が行われていた中に畿内の築造様式を取り入れはじめた初期段階のもので、規模も、全長が100メートル近くありこの地域では見られない突出したものである。さらに、その後は、前方後円墳は終息し中小円墳が中心となる。

中期後半から後期前半の墳墓群は羽床盆地縁辺部と岡田台地上に集中しており、それまでの横山山塊および高見峰山麓では希薄になる。

羽床盆地では、綾川脇の段丘縁辺部に円墳の群集がみられ、その中には津頭東、津頭西、末則古墳など他を圧倒するものも含まれる。

岡田台地上には車塚を中心とした数十基の中小円墳から構成される岡田万塚古墳群が形成される。岡田万塚古墳群は、早くからの開墾等によりそのほとんどが消滅しており、現在その姿を確認できるのはわずか6基となっている。

後期後半には、宇閑神社古墳などの横穴式石室を有する古墳が高見峰北麓に築かれているが群集は認められない。

古代遺跡については、原遺跡、庄遺跡、北原遺跡といった集落遺跡が発見されている。

中世に入る頃には、坂出市と境界をなす横山山頂に横山廃寺が建造されている。中世後半期には南部連山の城山の頂上付近に西長尾城が築かれる。

西長尾城は、三野郡詫間郷筥御崎を領して海崎伊豆守と名乗り白峰合戦での軍功を認められた長尾大隅守元高が応安元年（1368）に城主となる。長尾一族は、この地で勢力を伸ばしており、炭所、岡田、栗隈などに支城を構えて阿野、鶴足、那珂郡の南部で勢力を誇った。

その後、土佐の長宗我部一族の讃岐侵攻により城主が長宗我部元親配下の国吉甚左衛門へ代わり、讃岐の拠点としての役目を果たした。天正13年（1585）、豊臣秀吉の四国征伐により廃城するまでの二百年余り長尾一族及び長宗我部一族によって守られてきた城である。

また、集落としては岡田台地に北山遺跡が確認されている。

各時代を通じて近隣地域との交流が行われていたことを裏付けるように、他の地域で生産されたと思われる土器も数多く発見されている。

西長尾城は、三野郡詫間郷筥御崎を領して海崎伊豆守と名乗り白峰合戦での軍功を認められた長尾大隅守元高が応安元年（1368）に城主となる。その後、土佐の長宗我部元親の

讃岐侵攻に伴って、長尾大隅守は長宗我部配下の国吉甚左衛門城主の座を譲った。天正13年（1585）の豊臣秀吉の四国征伐により廃城になるまでの二百年以上に渡って長尾一族及び長宗我部一族によって守られてきた城である。

その間に、長尾一族はこの地で勢力を伸ばしており、炭所、岡田、栗隈などに支城を構えて阿野、鵜足、那珂郡の南部で勢力を誇った。



- | | | | | |
|--------------|--------------|-----------|-------------|-----------|
| 1. 西長尾城跡 | 2. 岡田城跡 | 3. 椎尾城跡 | 4. 栗隈城跡 | 5. 原遺跡 |
| 6. 佐古川遺跡 | 7. 行末遺跡 | 8. 北原遺跡 | 9. 椎尾遺跡 | 10. 椎尾東遺跡 |
| 11. 快天山古墳 | 12. 北原古墳 | 13. 岡田石棺群 | 14. 津森穴薬師古墳 | 15. 定連遺跡 |
| 16. 熊倉池東古墳 | 17. 定連池東丘古墳群 | 18. 平尾墳墓群 | 19. 畦田古墳群 | 20. 椿谷古墳 |
| 21. 佐古川・窪田遺跡 | 22. 石塚山古墳群 | | | |

第9図 西長尾城跡と周辺の遺跡の位置 (S= 1 : 25, 000)

3. 調査に至る経緯

綾歌町は、綾歌町森林公園岡田上国吉地区から栗熊西平尾地区に至る約250.34ヘクタールを綾歌町森林公園として整備を進めているところである。この中には城山を中心に広がる中世城郭跡の西長尾城跡の整備に関する計画も含まれており、どのような形で計画を進めていくのかを現在検討しているところである。

西長尾城について記述のある文献もあり、現在、様々な場面で研究がなされているところであるが、現地地の遺構状況については不明なところが多いことから町教育委員会では適切な調査を実施し、西長尾城の内容を把握したうえで整備計画を進めていくため平成8年度から平板による測量調査を実施して、基礎資料作成作業にとりかかっている。諸般の事情によって5年間継続した後、中断していた。尾根上面に展開する遺構もあと少しで分布状況をつかめるとのことから、今年度の実施となった。

測量調査にあたっての伐採は、昨年度、町の行う他の事業によって行っていたので改めて伐採する必要はなかった。

また、今年度の測量は、委託による実施とした。

調査箇所は、東端の二重堀切付近約1,500㎡と第23郭から山頂にかけての約800㎡である。

コンターラインは、以前のものと同様25cm間隔とした。

4. 地形の概要

昨年度までに実施した遺構分布確認測量調査によって約24,000㎡については遺構の分布状況が確認できている。

山頂部より北東方向に2筋の稜線が走っており、その東側の尾根上には連郭式郭列が大小合わせて10段設けられ、最下部は堀切によって断ち切られている。西側の尾根上にも同様に連郭式郭列が12段連なっている。

東側の郭列については、下から3段において南東肩に高さ1メートル、長さ30メートルに渡る土塁が造られている。また、西側の郭列についても、同様に北西端にそれぞれの郭を連結するように土塁が設けられている。このことから推察すると、北からの攻撃に対する防御と併せて、東西側面からの侵攻に対しても警戒していると考えられる。

これらの両尾根筋の間には、唯一の水源となる谷筋があり、加工によって平坦地になっている。この平坦地には4基の井戸が設けられていることから水の手郭の役目を担っているものと考えられる。これらの井戸は、積石も若干見られるが水深がなく湧き水を汲み上げるものではなく地表を這う雨水等を溜めて利用するものと考えられる。

水の手郭の奥には斜面に大小12条の連続する畝状の堅堀が検出されているが、これらの用途については確認できていない。推測としては、城内の侵攻を遮るためのものと考えている。

西側の連郭式郭列については、郭と郭の段差は概ね2メートル前後で奥行き10メートル、幅15メートル前後のものが北東に向かって連続して設けられており、その中間部分にあたる5段の郭列の西肩部分は土塁によって連なっている。また、この土塁からそれぞれの郭に進入できるように通路状になっていることから、この土塁は城内移動用の通路及



第10図 西長尾城縄張り図 (S=1:4,000)

び各郭への虎口も兼ねて設置しているようである。

更に、この西側の郭列において西長尾城の旧城から新城への変遷における改築の痕跡を確認することができる。第17郭から第19郭については下段の郭に面する肩部分が直線状に整形されており、そのそれぞれが平行に調整されていることから計画的に手を加えているものと考えられる。

城内移動用の通路については、完全には判明していないが部分的には確認できつつある。今回調査を実施したのは城山頂上から北東尾根に連続する連郭式郭列からは南東に少し距離を置いたところにある鞍部に差し掛かる手前に所在する連郭式郭列及び鞍部の北東部のピークに所在するヤグラ付近、その東部の堀切から東尾根に展開する延長160メートル余りの削平地である。

まず、主郭部の南東部に位置する標高329メートルの鞍部を隔てたところにある『ヤグラ』と呼ばれる標高339メートルのピークに南北33メートル、東西22メートルの平坦地(第28郭)が設けられている。この西端に東西5メートル、南北8メートル、高さ1.5メートル程の高まりがある。以前はこれが単なる土塁であると考えられていたが、その形状から考えると櫓台であると捉えた方がよいであろう。第28郭の北西部は2段の連郭式郭列を経て鞍部に降りる。更にその主郭側は大小3段の郭が連続する。最上段にあたる第23郭は標高が339メートルで櫓台のある第28郭と同レベルである。このことから考えると第23郭から第25郭は本丸を中心とした主郭に付随するものではなく第28郭のヤグラに関連するものであると考えられる。また、この鞍部から南側には通路が延びており、従来は城主の居館であったと考えられている超勝寺付近との連絡道であると考えられる。また、鞍部の南部には比較的幅員のある谷筋が下っており平野部から城内に進行してくるルートのひとつであると考えられる。その両方を挟み込むような配置となって

おり、重要な役割を担っていた箇所であると推察できる。

第28郭の櫓台の東側には堀切が設けられており、その切岸は5メートル以上の比高を計る。この堀切は比較的側面への延長があるようでその東の削平地とは一線を画しているようである。

堀切から東部は、起伏は見られるものの一連の削平地が展開している。その北辺は、町が森林公園整備に伴う管理道設置により掘削及び盛土によって原形を留めていないが、残存部分で測ると広いところで20メートル、狭いところでも8メートルの幅員を持つ。本来であればあと4～6メートル程広かったものと考えられる。延長は170メートルで最大3メートルの比高差の起伏を持つが、旧地形を利用したものであったり、岩盤露出による掘り残しであったりと意識的に高低差を設けているものではないと考えることができる。

しかし、この削平地の東先端付近の35メートル程(第30郭)は少し様子が違っており、ヤグラと思わせる状況が見られる。まず、第28郭の櫓台程の規模は持たないものの東先端部に高まりを持つことがあげられる。これは他の箇所で見られるような土塁というものとは明らかに異なるものであり第28郭同様櫓台と考えるのが適当と思われる。更に南片に土塁状の高まりがあることも以西の削平地には見られない特徴である。また、森林公園管理道整備により一部破壊されているが、櫓台の北側に枡形が備えられている。この東面には段差を設けて二重堀切が設けられており、東方面から城内へ進入するための玄関口となっていることから手の込んだ設備となっているのであろう。ちょうどこの位置からは第28郭及び本丸を直視することができる。

第28郭及び第30郭の間の削平地は、南北両斜面は元々急峻であることが要因しているのか特に防御的性格の装備がなされていない。踏査の結果、この削平地から北に延びる尾根上にも削平地化の痕跡が残っていることから、この削平地の主な用途は数千の兵を居城させるための陣城的要素が強い。

5. まとめ

中讃を一望できる位置に所在する西長尾城は自然の要害地形を巧みに利用している。更に、複雑な防塞施設を備えていることと巨大な収兵エリアを設けることによって、より一層協力的な防衛力を保持している。

平成8年度からの調査によって、西長尾城の尾根上に展開する遺構については、分布状況の確認ができた。これらの成果を十分に検討し、今後は、曲輪等の構造の解明に努めていきたい。

この調査成果は、この地域における中世城郭の研究課程において、模範と成り得る貴重な資料になると考えられる。

しかし、未調査部分も残っており、各方向からの検証が必要であるなど今後の課題も残されていることから、次年度以降についても当該調査を継続して実施していくことにより、西長尾城についての基礎資料の整備を早急に進めていきたい。

6. 追記

平成16年10月20日の台風23号の接近によって本町南部連山が大きく被害を受け

た。大高見峰、猫山、城山とほとんどの谷筋が土石流で崩壊した。

西長尾城跡についても、残念ながら被害を蒙っており、曲輪の一部崩壊と谷への土砂流入、豎堀の一部崩壊が見られる。

特に、南側は山頂からふもとの超勝寺までの大規模土石流が発生し、凄惨な状況となった。

現在も至るところにクラックが入り、二次災害の恐れもあることから、できる限り早い時期に遺構の確認調査を実施したい。

第3表 遺構一覽

(No. 1)

遺構の所在地	遺 構						付 属 施 設		
	名 称	形 状	規 模 (m)	上段郭との 高低差 (m)	備 考	名 称	場 所	規 模 (m) 奥行き×幅×高 さ (深さ)	備 考
山頂部	本丸跡	台形	23.0×22.0		礎石と思われる石が散布 以前瓦の散布もあった 登山道で一部破壊				
	山頂部の東尾根	第1郭	三角形	18.1×5.2	7.5	登山道で一部破壊			
山頂部の北東尾根 (東側)	第2郭	三角形	6.5×4.0	4.5	登山道で一部破壊				
	第3郭	不定形	12.0×5.0	0.8	登山道で一部破壊				
	第4郭	不定形	14.5×5.3	2.0	登山道で一部破壊				
	第5郭	不定形	29.5×7.8	2.3	登山道で一部破壊				
	第6郭	不定形	30.1×9.5	2.5	登山道で一部破壊				
	第7郭	不定形	28.8×2.0	2.3	登山道で一部破壊				
	第8郭	不定形	30.5×7.2	3.2		土塁	南東肩	28.6×4.0×1.0	
	第9郭	不定形	37.0×8.0	2.1					
	第10郭	不定形	18.0×8.7	2.3		土塁 腰郭 堀切 塹堀	北東肩 下 北東段下 北西段下 北東段下 堀切と連続	5.5×2.0×0.5 27.6×7.7×1.0 16.0×5.5 30.2×2.0×1.5 20.9×8.0×3.3	

遺構の所在地	遺 構						付 属 施 設			
	名 称	形 状	規 模 (m)	上段郭との 高低差 (m)	備 考	名 称	場 所	規 模 (m) 奥行き×幅×高 さ (深さ)	備 考	
山頂部の北東尾根 (西側)	第 11 郭	不定形	13.3× 3.0	4.8						
	第 12 郭	不定形	33.0× 7.3	4.0						
	第 13 郭	三角形	11.5× 6.0	2.2		積石列	南西側法面	13.5×2.0		
山頂部の西尾根	第 14 郭	不定形	10.5×11.0	9.0	瓦片の散布 登山道で一部破壊	犬走り	東部南北端	幅 1.0		
	第 15 郭	台形	17.2× 5.5			虎口 虎口	東南端 西部両端	幅 1.0 幅 1.0		
山頂部の北東尾根 (西側)	第 16 郭	台形	13.5× 7.4	4.0		虎口	西部両端	幅 1.0		
	第 17 郭	台形	17.0×11.1	3.5		土塁 虎口	北西肩 東西両南端	幅 1.0 幅 1.0		
	第 18 郭	不定形	16.6×18.2	2.8		土塁 虎口	北西肩 東南端	幅 1.4 幅 1.0		
	第 19 郭	三角形	19.0×12.2	2.0						
	第 20 郭	台形	10.0× 2.8	3.0						
	第 21 郭	台形	21.0× 9.0	3.5		土塁	南西肩	幅 1.8		
	第 22 郭	三角形	8.7× 8.2	4.8		土塁	東西両肩	幅 2.2		

遺構の所在地	遺 構						付属施設			
	名称	形状	規模 (m)	上段郭との高低差 (m)	備考	名称	場所	規模 (m) 奥行き×幅×高さ (深さ)	備考	
山頂部の南東尾根	第23郭	台形	11.0×6.0	14.0						
	第24郭	台形	31.5×19.0	3.0		杵形	西隅	6.5×5.5		
	第25郭	三角形	17.5×12.0	1.3						
東尾根の西端	第26郭	台形	18.5×12.0	3.0		土塁 杵形	南西肩 南隅	幅2.5 3.5×4.0		
	第27郭	長方形	25.0×5.2	3.7						
	第28郭	不定形	21.0×32.0			杵形 櫓台 堀切	西隅 東北東 東北東段下	4.5×4.0 5.0×9.0×1.5 33.0×9.0×5.0		
山頂部南東鞍部	第29郭	台形	19.0×5.0	3.2						
東尾根	削平地	不定形	延長136							
	第30郭	方形	36.0×20.0			土塁 杵形 櫓台 堀切 堀切	南肩 北東隅 南端 東段下 東段下	幅4.0 5.0以上×6.5 5.0×9.0 幅10.5 幅7.0		
	第31郭	三角形	13.0×5.0	4.0						
東尾根北側	第32郭	三角形	28.0×8.0	4.0						



図版13 西長尾城跡遠景



図版14 西長尾城跡近景



図版15 調査風景



図版16 調査風景



図版17 二重堀切



図版18 二重堀切



図版19 主郭部近景



図版20 第30郭枡形虎口

台風23号による被害状況



図版2.1 遠景（北から）



図版2.2 遠景（南から）



図版2.3 主郭部近景



図版2.4 第2.4郭東面



図版2.5 主郭部から南側を望む



図版2.6 第3.2郭



図版2.7 第2.4郭西面



図版2.8 第2.2郭西側

第IV章 ま と め

綾歌町では、平成8年度から国庫及び県費補助により綾歌町内遺跡発掘調査事業を実施している。今年度については県費補助の配分はなかったが、国庫補助により同事業を継続して実施することになった。

今年度の調査については、栗熊西字板井戸から富熊字沖に所在する行末西遺跡と岡田上国吉地区に所在する西長尾城跡を調査対象として実施した。

行末西遺跡は、隣接して所在する弥生時代前期の行末遺跡と併せて拠点集落として考えられている集落遺跡である。平成7年度には綾歌町の実施する町道西行末本村線の拡幅改良事業に伴って発掘調査が実施されており、弥生時代前期から古墳時代初頭にかけての遺物や遺構が多く見つかっている。

今回、その東側隣接地で2件の小規模開発が計画されたことに伴い、分布状況の確認調査を実施した。

その結果、南側の調査区では、溝を主体とする遺構の分布が確認できた。埋土中の包含遺物から弥生時代後半から古墳時代初頭にかけて使用されていた溝であることが確認できた。残念ながら、上半部が後世の削平を受けており本来の姿を確認するには至らなかった。しかしながら、柱穴痕とみられるものも1つ見つかっていることから、当時は密度こそ不明であるが、住居の分布があったと考えることができる。

北側の調査区では溝状の落ちの確認できるものの、遺物を伴うものでないことおよびトレンチの反対側で対応する落ちの確認が取れなかったことから、断定はできないが包含層中に微量の遺物を伴うことから遺構の分布を否定する結果にはならなかった。

幸いにして、いずれの計画もトレンチ掘削した箇所以外の掘削計画はなく、全て盛土を行った後、その盛土中で事業を行うことから、遺構の分布があったとしてもその破壊には至らないことが確認できた。

西長尾城跡は、岡田上国吉地区に聳える城山山頂を中心に展開する中世城郭として古くから知られており、部分的に後世の開発等により破壊されているものの、ほぼ当時の姿を現在まで伝えている。

綾歌町が実施する森林公園整備計画を進めるなか、その範囲内に所在する西長尾城跡の取り扱いについて様々な論議が交わされているが、西長尾城の遺構分布状況が把握できていないことに伴い、調整作業も滞っている状況である。

町教育委員会では、基礎資料を整備するために平成8年度から平成12年度まで西長尾城跡の遺構分布確認調査を実施してきた。諸般の事情により、その後の継続はできていなかったが、今回調査を再開することとした。

調査は、これまでは直営で平板測量による遺構分布確認調査を行ってきたが、今回は委託による機械測量での実施とした。平板測量と比較すると細かさには欠けるものの大まかな地形は確認することができるうえ、時間的にも相当短縮することができたことは、大きな成果であったといえる。

平成12年度までに本丸跡を中心とした連郭式郭列の展開する主郭部の測量およびその

南東の鞍部を隔てた場所に位置する『ヤグラ』と呼ばれるピークとその周辺及び東の猫山に向かって延びる尾根上に展開する削平地の測量が終了しており、東端の二重堀切や部分的な空白部分を残すのみとなっていた。

今回の調査では、尾根上の主要遺構を確認するための最終調査年度として位置づけたことから、その残されていた箇所を測量を実施した。

今後は、今回までに得られた基礎資料をもとに、各遺構の構造確認調査を実施していきたいと考える。

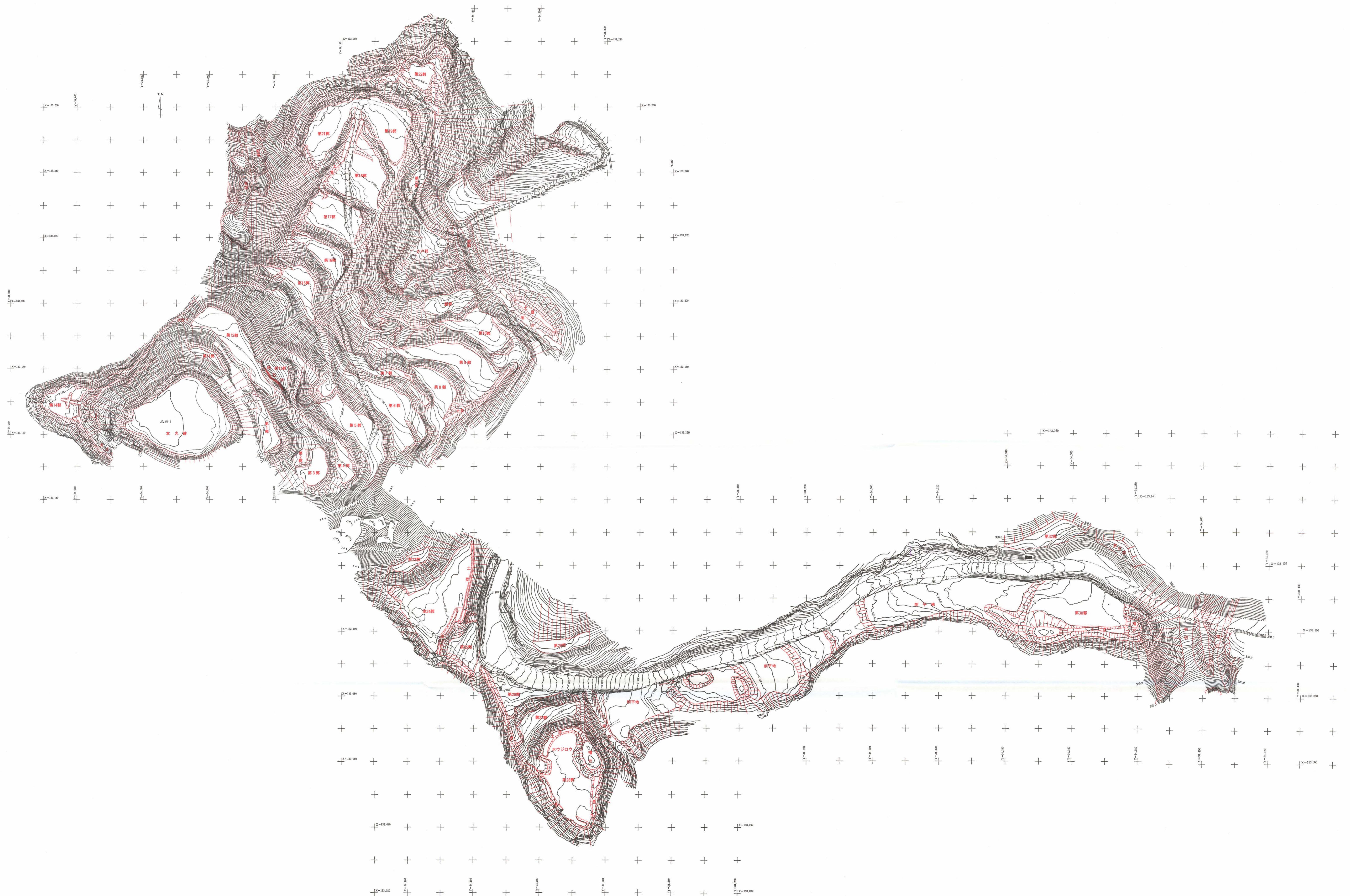
また、残念な結果であるが、平成16年10月20日の台風23号の接近によって数箇所崩壊による被害を受けてしまった。これらの箇所については、二次災害の恐れもあるため、できる限り早急に確認調査を実施したいと考える。

以上、今年度は行末西遺跡の試掘調査と西長尾城跡の測量調査を実施した。綾歌町としての調査は、平成17年3月22日の市町合併により今年度が最終になるが、当調査については、次年度以降、新しい『丸亀市』で継続して実施していきたい。

また、今回までの調査で得た資料は、次回の調査等に効率的に活用していきたい。

報告書抄録

ふりがな	あやうたちょうないいせき はくつちょうさ ほうこくしょ							
書名	綾歌町内遺跡発掘調査報告書							
副書名	平成16年度国庫補助事業報告書							
巻次	2005.2	シリーズ名	綾歌町内遺跡発掘調査報告書	シリーズ番号	第9集			
編集者名	綾歌町教育委員会 近藤 武司							
編集機関	綾歌町教育委員会							
所在地	〒761-2492 香川県綾歌郡綾歌町栗熊西 1638 Tel0877-86-5963							
発行年月日	2005年 2月28日							
頁数	例言・目次等	本文	挿図	表	図版	総頁		
	7頁	28頁	11枚	5枚	28枚	35頁		
ふりがな	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
所収遺跡名		市町村	遺跡番号	° / ′ ″	° / ′ ″			
いくすにしいせき 行末西遺跡	綾歌町 栗熊西字板井戸 1180-4 1181-2 1182-1 1182-4 1182-5 富熊字沖 826-1 827-3	37384	00002	34度 14分 16秒	133度 52分 46秒	2004.6.9 ～ 2004.6.30	219	遺跡分布調査
にしながおじょうせき 西長尾城跡	綾歌町 岡田上字国吉 2312-10 2312-13	37384	00035	34度 12分 1秒	133度 52分 11秒	2004.7.20 ～ 2004.9.17	2,300	遺跡分布調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
いくすにしいせき 行末西遺跡	集落跡	弥生	溝		サヌカイト片 弥生土器片 土師器片			
にしながおじょうせき 西長尾城跡	城郭	室町	郭 堀切 井戸 土塁					



第11図 西長尾城跡 測量・遺構分布図 (S=1:500)

平成16年度国庫補助事業報告書
綾歌町内遺跡発掘調査報告書

平成17年 2月28日

編集・発行 綾歌町教育委員会

綾歌郡綾歌町栗熊西1638

電話(0877) 86-5963

印刷 四国工業写真(株)